《在鳴門》2011 年 11 月　第 74 期

1、張家界市訪問団が鳴門に観光

11 月 15 日､張家界市桑植県から来られた 5 名の訪問団の方々が鳴門で観光しました。午前中、訪問団のみなさんは大津農協を訪問し、地元の農業の状況や、農家の方々の暮らしなどについて質問し、市役所農林水産課職員と農協職員が詳しく説明していました。その後、蓮根などを栽培している農家を見学しました。その農家の方の作業場で、訪問団は、蓮根を洗って、包装する作業を興味津々で見ていました。また、作業場では 4 名の中国山東(さんとう)省からの研修生と出会い、楽しく話をしました。そして、畑に行って、蓮根を収穫する様子を見学しました。最後に、訪問団のみなさんが農家の方の自宅を見学したいということをお願いすると、農家のご主人は快く引き受けてくださり、親切にみなさんを家に招待してくれました。立派なお宅の応接間でコーヒーを飲みながら、話をしました。みなさん、非常に楽しそうでした。そして、訪問団員のみなさんは農家の方の豊かな暮らしに感動されていました。

午後、訪問団は鳴門市ドイツ館と霊山寺、渦の道および架橋記念館を観光しました。団員は全員カメラを持っていたので、観光しながら頻繁に立ち止まっては、写真を撮っていました。綺麗な夕焼けを長い間写真に撮り続けていました。お別れ時には、みなさん別れを惜しんでいました。団長は、訪問団を代表して鳴門での手厚いおもてなしに対し感謝の意を表していました。また、鳴門の方々に張家界へ来るようにお誘いしていました。

張家界市訪問団と農家の記念写真

子供相撲大会の場面

2、子供相撲大会

日本には、子供が三歳と五歳と七歳の時、お祝いをする習慣があります（七五三はもともと旧暦 11 月 15 日であって、現在、西暦 11 月中であります）。中国では、子供が一ヶ月と百日、十二歳の時に親族が集まって祝う習慣があります。

11 月 12 日の土曜日の午前に、遊びのつもりで山登りに行くと、意外なことに、一年に一回、七五三を祝うために開催する、木津神区子供相撲大会に出会いました。その光景は、中国人にとっては珍しいものでした。金比羅神社の正門には、相撲大会の旗を掲げていました。山の上の方からスピーカーの音が聞こえ、子供たちとその家族が行き来していました。山腹の会場で、子供たちは二人一組で試合を行っており、激しい試合の最中でした。行司は伝統的な帽子を被っていて、子供たちは皆半ズボンをはいて、男の子は上半身裸で、女の子はシャツを着ていました。子供の相撲とはいえ見事でした。土俵から押し出されるか、体が土俵につくと負けです。試合は、性別や体重で区別することなく対戦していました。太く大柄な生徒　対　細く小柄な生徒が試合をするとき、観衆の大人たちは大笑していました。ある女の子は自分より背の高い男の子に勝ち、大きな拍手が送られていました。日本の子どもたちのたくましい姿を見て、「百聞は一見に如かず」だと思いました。

3、山林を散策

長谷寺に入って、庭には、大きく太い銀杏が見えました。幹の直径はおよそ２メートル、上の枝葉の横幅はおよそ１７メートルの大きさで、高さは約９メートル、よく茂っています。青島市の嶗山（ローサン）太清宮にある２本の三十メートル高さ、直径１.５メートルの巨木の千年銀杏と比べると全然違います。その原因は、おそらく鳴門には台風がよく来るので、木が高くなると折れやすいからかもしれません。

山を登ると、小道は閑散としていて、石の階段が敷かれており、倒れた木が山道の両側に転がっています。あるご年配の職員の方が、道を掃除していました。道の傍らにいくつかの看板が見えました。例えば、「杖をご自由に使ってください。」、「わがなげし、えさを運びてついばみぬ、鳥またツイツイと鳴く」、「山、高きをもって貴しとせず、緑をもって貴しとす」、「いのちを延ばすだから、山はいつも友達」などが書かれていました。

山頂には、一棟の小屋があります。中に人はいません。小さな仏像が、壁の上の方にかかっています。二本の竹の中に、小犬の玩具が飾られているのがとてもかわいい。小屋の周りには小石の仏像が一列に並んでいます。

鳴門の中心部へ自転車を 10 分間走らせると、棒杭山（名前がちょっと面白い）に着きました。市街地と郊外の連接部にあります。山林が茂り、真っ赤な花が盛んに咲いていますが、花の名前はわかりません。山頂には、一本の旗竿があったが、旗がありません。旗竿の表面に小さな虫がたくさんついていました。棒杭山の山頂から、鳴門市内を眺めて、青空と碧海を一望し、気分が爽やかになりました。

4、寺院と神社

日本の到る所には、寺院が多くあり、庶民の日常生活の信仰と心のよりどころの場所でもあります。鳴門の長谷寺には、地蔵菩薩の周りに子供たちが集まっています。日本の地蔵菩薩は世継ぎと関わっています。中国での、仏教の世継ぎ観音は南海観音菩薩（女性）

です。常に信者は世継ぎを求めて参拝します。現代では、日本の仏教は世俗化され、和尚はひとつの職業になり、和尚さんでも結婚できます。仕事は主に法事に関わるものです。中国では、和尚さんが昔から今日まで結婚できず、結婚したければ俗世に戻らなければなりません。霊山寺の参拝者たちは立って合掌し詣でます。それに対して、中国寺院では、信者は座布団の上で土下座し参拝します。

鳴門には、金比羅神社や、八幡神社の歴史がとても古いです。中国には古代から神教の信仰も続いています。たとえば、神話伝説中の天神、地神、昔の多くの英雄や名人の廟宇、祠堂はどこでもあり、一般の方の間でも供養されています。それは日本の神社と形式上では大した違いがありません。中国の道教は実は神教のひとつであります。供養の神は道教の伝説中の祖師本尊。青島ロウ山太清宮は中国の名高い道教の聖地であり、千年の悠久の歴史があります。

長谷寺院内の銀杏

長谷寺院内の風景

5、社交習慣

日本社会での交際では礼儀が重視され、体が触れるのを避けます。お辞儀は、いつでもだれにでも行われます。また、お辞儀の角度によって、敬意の程度が異なります。中国社会では、お辞儀の代わりに握手をします。その握手も程度により敬意の程度が異なります。握手の力が強いと親近感があり、弱いと日本の会釈と同じくらいの敬意を表します。日本人と中国人が対面した場合、中国人は手を出して握手しようとしますが、相手側の日本人はすでにお辞儀しているなんてこともあります。

また、お客さんをお見送りする場合、日中の習慣も違います。日本で、特にマンションの場合、出入りの際に靴を脱いだり、履いたりします。それが、少し不便なので、お客さんを見送るのは玄関まででしょう。しかし中国では常にお客さんを門の外までお見送りし、お客さんが遠くまで去った後に家の中に戻ります。私は商工観光課で常に来庁者を正門まで見送りますが、お客さんには理解されず、私が外に出かけるかといつも勘違いします。

日本人と中国人が一緒に食事をする場面では、日中の習慣の違いが最も大きく表れ、時にちょっと堅苦しい雰囲気になるかもしれません。初めてお互いの国に行った時、食事の習慣の相違を肌でじみじみ感じるはずです。日本には、多くの場合、料理は一人分が用意されており、自分のを食べたり、酒を飲み、あまり相手に料理や酒を勧めません。一方、中国では、食事前、通常、ホスト側が挨拶をして、お客さんと乾杯するという流れです。たとえお酒を飲まなくても、お茶でも必ず乾杯します。お客さんもホスト側の勧めにより乾杯し、勧めがなければあまり飲みません。また、中国では料理は大皿で出されて、常にホストあるいは店員がお客さんのお皿に料理を分けます。ホストはお客さんに絶えず料理や酒を勧めます。これは、外国人にとっては馬鹿丁寧、或いは親切すぎると思われるかもしれないですが、それは中国社会の古くから続く根強い習慣なのです　。